

フランスの天理教

ライシテの歴史について時間をかけて振り返って来た。現代のライシテに関してはまだ触れるべきこともたくさんあると思うが、現在進行形の問題も多く、必要があればここからの考察に加えていきたい。

さて、本稿の目的はライシテの歴史を振り返ることではない。そこに十分に時間をかけてきたのはそこに意味があると考えたからであり、ライシテの歴史を知らずしてフランスの宗教問題を語ることは難しいと思ったからである。本考察の目的は、天理教のフランス布教についてである。そしてそれは天理教のフランス布教の歴史や現況について振り返るのではなく、今後天理教がどのような展望をもってフランス布教を進めていくべきなのか、進めていけるのか、進めていけないのか、という点である。

フランスで存在感のある宗教（カトリック、プロテスタント、ユダヤ、イスラム、仏教）に比べ、天理教の歴史は比較にならないほど浅い。フランスの天理教となるとさらに短い。1910年の船場大教会布教師によるイギリス布教が天理教のヨーロッパ布教の端緒とされるが、フランス布教が本格的に始まったのは1970年のヨーロッパ出張所（当時はパリ出張所）開設前後と考えていいだろう。その開設と切っても切り離せない関係にあるのが、天理日仏文化協会である。天理教ヨーロッパ出張所と1971年に開設されたこの文化協会は車の両輪のごとくその歩みを進めることになる。開設場所も、出張所がパリ南郊10kmの町アントニー市、文化協会はパリ4区のダンフェールロシュロー地区（現在は同市1区のシャトレ地区）であり、地理的にも遠くはない。開設年が近いということは、開設に尽力した人々が同じ人たちであったということにもなる。つまり、天理教の布教と文化協会の設置には深い関係性があると考えてよい。文化協会で行われる文化活動を通して、フランス人が天理教についてよりよく理解してくれることを期待したと推察される。言い換えれば文化的なアプローチが天理教の布教にプラスに働くという考えがあったということだ。文化布教という言葉が使われることもある。天理教のフランス布教、ひいては海外における布教を語る時に、時々使われる言葉である。この問題について詳しいわけではないが、多くの考察や論考が出ていると思う。天理日仏文化協会は、日本語教育を始め、日仏交流事業、フランス語講座、図書館、アートギャラリー、コンサートやダンス公演、各種講演会など多岐にわたり活発に文化活動を展開している。

またもう一つ、天理教のフランス布教で重要なポイントがある。柔道である。ご存じの方も多いと思うがフランスは柔道が盛んだ。そして、天理大学の柔道は世界的な名声を誇っている。天理市に足を踏み入れたフランス人の柔道家は数知れず、オリンピックのメダリストも例外ではない。そんな中、天理教の教えを聞き、ようぼくとなったフランス人柔道家も多い。歴史の

浅い天理教にはその教えに触れてもらうためのきっかけが必要だが、柔道はその大きなきっかけとなった。

これらは、日本文化だけでなく海外の文化にも関心が高く、またスポーツの振興にも力を入れている天理教の社会面での長所をいかに発揮し、宗教的な発展につなげている興味深い例であろう。そして、こうした活動は今後の天理教のフランス布教を考える上でも重要な視点であり続けるだろう。現にリヨンという500キロも離れた地方都市においても日本語教育におけるパリ天理日本語学校の存在はよく知られているところだ。

しかし、私がここで考えたいのはそれらではない。その理由は、日本語教育やスポーツといった非宗教的な事業ではなく教理実践の面からフランス布教について考えてみたいからである。天理教ヨーロッパ出張所開設以来50年以上が経過しているが、現状は決して信者数が多いとは言えない。ポルドー教会という例外を除けばフランス在住の信者は日本人、あるいは家族など日本に何らかの繋がりを持つ非日本人信者が大半だと言える。信者数が伸びないのは、天理教の教えに原因があるのか、日本から来た宗教という文化民族的な面が障壁となっているのか、在仏信者の布教努力が足りないのか、あるいは単に現代人の宗教離れなのか、さまざまな原因が考えられるだろうし、おそらく多くの要因が絡み合っているのだろう。

しかしこのような考察をしたいと思うのは、もちろん天理教の教えそのものはフランスでも十分に受け入れられると信じているからである。先ほども述べたように、天理教は歴史の浅い宗教だが、逆に近代的な開かれた思想も大いに含んでいる。前出のポルドー教会にはたくさんのフランス人が足を運び、はるか日本の天理市にまで旅をして、別席のお誓いというかなり高いハードルを越えてようぼくになるフランス人が多数いるのである。天理教の教理と信仰実践で、何であればフランスで受け入れられ、どんなものがフランスでは受け入れられにくいのかを考えてみる価値は十分にあるのだ。ただ一つ注意しておきたいのは、日本では受け入れられフランスでは受け入れられないであろうものを考察する際には、天理教の日本における現在の形態に対して否定的な意見を述べることもありうるという点だ。あくまで強調しておきたいのは、この考察は天理教のフランス布教に限定されるもので、日本の天理教のあり方を問題視しているのではなく、また世界中の国々における天理教布教の展望について語るわけでもないという点だ。ある天理教の実践形態がフランスで通用しないからと言って天理教全体を否定しているわけでもないし、フランスで通用するであろうことが世界中で同様に通用するというわけでもないことをくれぐれも了解してお読み頂きたい。天理教教祖中山みきの教えの根幹には心の自由があり、その個々人の自由な心の持ちようが信仰実践に多様性をもたらし、かつそれを許容できる深みを与えていると考えている。次回からは具体的な例をあげて私見を述べていきたい。